

キャリアは、ひとつじゃない。——副検事という選択。

【自己紹介】・交通部副検事 検察庁に入庁して 12 年目

(検察事務官時・検務2年、事務局1年、捜査公判8年を経験)

1. 入口——なぜ検察事務官になったのか

法学部出身ですが、司法試験は目指しておらず、公務員予備校に通っていたところ、国家公務員一般職の就職先に検察庁があり、大学や予備校で学んだ法律の知識が生かせる仕事として検察庁を志望しました。

検察庁の業務説明会に行った際などに副検事になれるということを知り、選択肢として考えていました。

2. 現場——検察事務官として、どのような仕事をしていたのか

また、どんなことを考えて、仕事をしていたのか

痴漢事件で否認している被告人の弁解で、公判の被告人質問が終わった後に被告人の供述の不合理な点を検事に話してみたところ、検事から「確かに。」等と言われ、検察官の主張（論告）に盛り込んでくれたことが印象に残っています。

捜査公判という特殊な分野に関わることができると同時に、総務課や会計課のような一般的な事務職まで幅広い業務を担い、社会人として成長できるとともに、検察庁という国の機関の土台を支える重要な職務を担うことができる点が検察事務官の仕事の魅力です。

3. 決断——なぜ、副検事を目指したのか

検察庁入庁時から副検事を選択肢として考えており、検察事務官をする中でも自分の法律

的な知識をより強く仕事に生かせる副検事になろうと思いました。

副検事試験や任官後の業務は、努力は必要であるものの、毎年一定数の試験合格者がいて、それらの方々が業務をこなしており、任官後の研修もあるので、自分にできないものではないと思っていましたので、不安はなかったです。

受験に対するサポートは、論述の起案を検事に見てもらったりするなど、手厚いサポートがありました。

4. 現在——検察事務官としての経験はどう生きているか

自分の立会事務官の仕事量を把握したり、事務手続を把握した上で捜査公判の段取りを考えたりと、事務官の知識が大いに役立っています。

立会事務官の経験があることから、立会事務官の気持ちもよく分かります。

副検事に任官してみて、改めて検察事務官の職務の重要性を感じます。

5. 未来——その先に見えているもの

副検事は検事に比べて異動が少なく、地元に着いて仕事ができると思います。警察官や福祉機関とも信頼関係を築き、地域の治安維持に貢献したいと思っています。

刑事手続はもとより、心理学や精神病等の医学、科学捜査の知識、ITの知識、外国人の関係者に関して語学や外国の文化など幅広い知識を得ていきたいと思っています。

副検事としての能力を高め、地検の支えになりたいと思っています。

5. みなさんへのメッセージ

被疑者の逮捕や搜索差押えなど公安職ならではの業務も経験できます。興味をもって取り組み、面白い職場だと思います。

検事も副検事も、刑事手続においては同じ検察官で、権限も同じです。検察官の刑事手続における役割は重要で、裁量も大きいです。

そのような検察官を支える検察事務官の職務はやりがいがあり、自分も成長でき、さらには安定した職で福利厚生も充実しています。オススメです。